

試験研究成果普及情報

部門	資源管理・増養殖	対象	研究・普及
課題名：アサリ天然種苗を用いた垂下式育成技術			
〔要約〕東京湾の干潟沖合で、アサリの天然種苗を用いて秋冬季減耗を防ぐための垂下式の育成技術を開発した。垂下水深、容器の材質、収容密度、基質の有無、垂下方法を整理し、秋冬季の垂下式育成（4か月間）で、生残80%以上、増重量100%を確保した。			
キーワード アサリ、保護育成、垂下式、増重量			
実施機関名	主 査	水産総合研究センター東京湾漁業研究所	
	協力機関	金田漁業協同組合	
実施期間	2016年度～2020年度		

〔目的及び背景〕

本県のアサリ年間生産量は、かつて1万トン以上であったが、近年は1千トンを下回っている。東京湾では毎年、アサリの稚貝（種苗）は発生しているが、秋冬季に波浪等の影響により、著しく減耗する。アサリ資源を回復させるためには、秋冬季の減耗を緩和させることが重要であり、その1つの方法として垂下式育成技術を開発した。

〔成果内容〕

- 1 木更津市中島の干潟の沖合水深8mの海域に、浮き流し施設を設置して（図1）、平成28～30年の11～3月（一部4月まで）の4～5か月間、垂下式育成試験を行い、垂下水深（2～6m）、容器の材質（カゴ、網袋）、収容密度（500～1500個/容器）、基質の有無を検討した。さらに、複数の容器の垂下方法について、中通し式と振り子式での生残率、増重量の比較を行った。
- 2 垂下水深は、全層で生残率、増重量に有意な差はみられなかった。容器の材質についても、両方で生残率、増重量に差が見られなかったが、取扱いやすさの点で網袋が優位であった。
- 3 アサリの収容密度について、500、1000、1500個/袋で比較したところ生残率と効率性から1000個/袋が最適と判断された。一方、基質の有無による差は見られなかった。複数の網袋を吊るす方法としては中通し式が優れていた（図2）。
- 4 1～3の結果をもとに、垂下水深は2～6m、容器の材質は網袋、収容密度は1000個/容器、基質は無し、中通し式垂下の条件で、令和元年11月から4か月間、48袋を育成試験したところ、生残率80%以上、増重量100%となった（表1）。秋冬季のため稚貝は成長しないが、アサリ天然種苗の秋冬季減耗対策の方法の1つとして垂下式育成技術を活用できることがわかった。

〔留意事項〕

特になし

〔普及対象地域〕

市川・船橋地区、木更津地区、富津地区

〔行政上の措置〕

特になし

[普及状況]

特になし

[成果の概要]

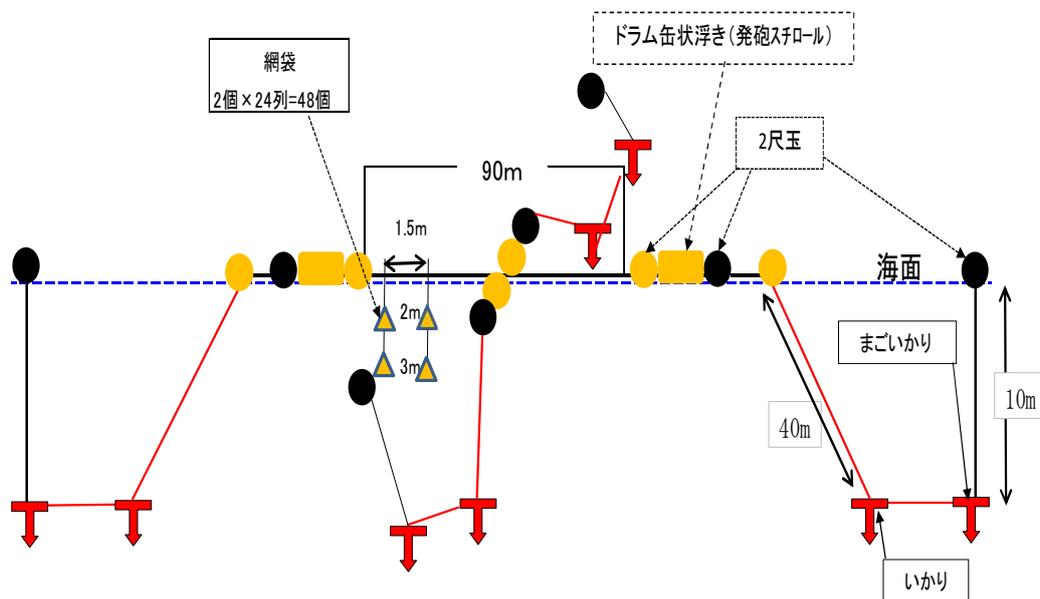


図1 垂下式育成図（模式図）



図2 中通し式（網袋）

表1 令和元年度垂下式育成結果

	開始時	1か月後	2か月後	3か月後	4か月後
生残率 (%)	100	93.1	88.7	85.9	85.9
増重量 (%)	100	112.8	109.6	116.5	106.9
平均殻長 (mm)	23.8	21.1	21.7	22.0	21.8

[発表及び関連文献]

特になし

[その他]

特になし